
楽園 ~ deep blueによせて ~

エリー・ドーラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽園 ～ deep blue によせて ～

【Nコード】

N4453F

【作者名】

エリー・ドーラ

【あらすじ】

太平洋に点在する小島の巫女の誰にも語られることのない苦悩。これから島はどうなってしまうのか？

第一話

遙か彼方に見える水平線と空の境目から、幾重にも重なる様々な青は

やがて穏やかに寄せては返す波となつて 熱く焼けた砂浜にたどり着く。

不変に寄せては返す波の音は静かに深く、 眩く光る空に響き続けた。

やわらかな森の木漏れ日を浴びながら、カリ・ヒは思い悩んでいた。

巫女である自分にとっての限界を感じていたのだ。

カリ・ヒは太平洋に点在する小島のひとつマウリ島の巫女として幼い頃から、その人生を生きてきた。

古来よりカリ・ヒの一族は巫女として精霊の声を聞き

善きことと悪しきことを人々に伝え自然と共存することが

人間として最も豊かで幸せなことなのだと説いてきた。

だが、カリ・ヒの代になりマウリ島にも資本主義の手が伸びてくるようになった。

幾度となく訪れては、マウリ島に観光開発を言葉巧みに勧める他国の人間に

最初は胡散臭く感じ、島の開発に難色を示していた島の住人たちも、

やがて時が経つにつれ段々と態度を軟化させるようになった。

古くからの風習を守り、神々に感謝を捧げる今までの生活も悪くはないが

蛇口をひねれば水が簡単に手に入り、火を起こさなくとも家が明るく灯される

電気のある生活にささやかな夢を抱いた。

神々と精霊が棲むと言われる『聖なる場所』さえ汚さなければ
多少の開発もいいだろうと考え始めたのだ。

若いカリ・ヒには、考えを変え始めた住人達を 抑えることが出来
なかった。

苦悩の末にカリ・ヒは島の開発を認めたのだった。

しかしいざ開発が始まってしまうと、

島はどんどん切り開かれ多くの自然が消されていく。

島全体を覆っていた森の緑は今は三分の二くらいに減っていた。

その頃からカリ・ヒの心に届く精霊たちの声が

ほとんど聞こえなくなってしまうたのだ。

精霊の声が聞こえなくて、

もう巫女としての役目は果たせなくなってしまう。

カリ・ヒは巫女として恐れていた。

すべての精霊の声が聞こえなくなること・・・

第二話

浅いまどろみの中で、斉藤真弓は

この上ないしあわせな気分を味わっていた。

婚約者の湯本哲司と 二人で訪れた南国の島は

まさに楽園と言う形容詞がぴったりの美しい島だ。

『神々の棲む最後の楽園』というキャッチフレーズと、

パンフレット一面に写し出された 透明な海の青さに心惹かれ

迷わずマウリ島に婚前旅行を決めたのは真弓だった。

来年の春には結婚式を控え、今が一番しあわせなのかも知れないと思いつつながら

このままずっと時が止まってくれればいいのにと真弓は願う。

珊瑚礁に囲まれたプライベートビーチで、まばゆい南国の光を浴びながら真弓は

「こんなに幸せで怖いくらい……」

とぼつりとつぶやいた。

真弓を残し、ひとり海に出ていた哲司がやがて波の間から姿を見せた。

初めてシュノーケルを経験した哲司が子供のような無邪気な笑顔で真弓に手を振る。

哲司の笑顔にこたえて真弓もちぎれんばかりに手を振った。

寄せては返す波をかき分けて、哲司は笑顔のまま真弓の元に戻って来た。

その手にはひと塊の珊瑚が握られていた。

「ほら！真弓のために取ってきたんだ」

と笑いながら、哲司は真弓に差し出した。

「え……。こんなの獲っていいの？」

一瞬のためらいを見せた真弓に

「大丈夫だつて！ ここのまわりは珊瑚だらけなんだしさ。ちよつとくらい、構やしないさ」

と哲司は言い、真弓の手の中に珊瑚を握らせた。

「嬉しい。ありがとう」

笑顔で言う真弓の心の中に得体の知れない不安が一瞬過ぎる。

『神々の棲む最後の楽園』。

この言葉を信じているわけではなかったが、

美しい楽園の一部を破壊したのではないかと思うと、うしろめたさが拡がった。

うつむき加減の真弓の顔は、はにかんだようにも見え哲司は愛しい気持ちを抑えきれず

真弓の細い体を抱き寄せた。

まるで自分の不安をかき消すように力強く抱きしめる哲司の腕に身を任せ

真弓は甘い吐息を漏らす。

「哲司、もっと強く抱いて。キスして……」

抱き合う二人の背後で波はさざめき寄せては返していた。

第三話

椰子の林を抜け、砂浜に出ると果てなく続く水平線。

他に視界を遮るものは何もなく、ただ広がる海の青を眺めながら

「素晴らしい。実に素晴らしい！ これこそ理想的なリゾートだ」と、ロバート・マクダウェルは満足気に呟いた。

恰幅のいい体にアロハシャツを身にまとい、白髪の間からところどころ地肌が見える。

まばらな白髪をたくわえたこの男が、リゾート開発会社の社長だと気づく者は少ないだろう。

何度も素晴らしいと目を細めるロバートに

「では社長、次はここにリゾートホテルを建設ということだ」

この海には似つかわしくないダークスーツに身を包んだ男が聞いた。「そうだな。いいかもしれん」

「ちょっと待ってください」

突然声を荒げたのは、開発責任者であるジョン・スレイターだ。

「何かね。何か問題でも？」

くわえた葉巻の煙をくゆらせ訝しげに尋ねるロバートに、ジョンは「これ以上の開発はこの島に必要なと思われます。これ以上は環境破壊ともなりかねません」と申し出た。

「環境破壊？今さらかね」

鼻で笑うロバートに

「最初に島民との約束で、必要以上の開発はしないことになっています」

さらにジョンは食い下がった。

「島民が何だと言った。結局奴らは金を選んだんだぞ。金さえくれてやれば何も問題はあるまい」

「しかし！」

詰め寄ろうとするジョンをダークスーツの男が遮った。

「いい加減にしたまえ、ジョン。我々のボスは彼だ」

「君が反対するならそれも良からう。」

だが、君の代わりなどいくらでもいることを忘れずにな」

くわえていた葉巻を砂浜に投げ捨てると、

ロバートは見下した目付きでジョンに言い放つ。

ロバートの言葉に力なく肩を落とすジョンの頬を、

南国にしては珍しいくらいの冷たい風が吹きつけた。

第四話

凪いだ海の上で小船はゆらゆらと揺れる。

いつもと変わらない海と空。

だが船上のモロの心は穏やかではなかった。

この島に住む漁師としては犯してはならない禁を破ってしまったのだ。

島の巫女からの命令で、今日は海で漁をしてはいけない日なのだ。

それは古来から島の漁師に伝わる掟でもあった。

しかし相棒のヤムは漁に出ることを止めなかった。

「こんなにいい天気の日に出ないなんてどうかしてるぜ」

「だけどヤム、掟だろ？」

「はん！古臭い掟が何だつてんだ。俺ら漁師は魚を獲るのが仕事なんだぜ」

どうなだめても海に出ることに執着するヤムに 引きずられる形で漁に出たものの

モロの心には暗雲が立ち込め、悪い予感がぬぐいきれなかった。

幼馴染のヤムが漁に出ることに執着する理由はモロにも分っている。

モロもヤムもまだ年端のいかない少年だが、彼らが働かなければ

満足に家族が食べていけないほど二人の家庭は貧しいのだ。

海さえ荒れていなければ漁に出て、たくさん魚を獲ることこそが彼らに与えられた生きる術なのだった。

だが信心深いモロにとって巫女の命令を破ったということは、神の御心に背いたと同じ大きな罪なのだ。

モロの胸に立ち込めた黒い不安の霧はいつまでも晴れることはない。

ところがモロの気持ちとは裏腹に、魚は面白いように釣れる。

網を打てばたちどころに大漁となり

相棒のヤムは笑いが止まらないようだ。

「ほら見る！こんなに魚が獲れるなんて今日はついてる」
そう言ってから

「他の奴らは馬鹿だ。古い掟を守って漁に出ないなんてよ」と悪態をついた。

「でも……。ヤム、俺は何だか怖いよ」
弱気なモロに

「怖い？ 何が怖いってんだ。禁を破った罰が 下るかもしれないって思ってたのか」

にやにやと笑いながら意地悪くヤムが聞いた。
言葉もなく、小さく頷くモロに呆れ顔で

「馬鹿な奴だな。罰なんか下るもんか」

強気に吐き捨てたヤムの声をかき消すように、ザンと白い飛沫を上げ波の音が鳴り響いた。

第五話

美しい白い砂を汚すかのように、まだくすぶり続ける葉巻を拾い上げ

長老キマリは苦々しい表情で首を振った。

深いしわが刻まれた面差しに暗い陰が差す。

キマリは、今さらながら自分のしたことに後悔の念が拭えなかった。

島の巫女カリ・ヒを説き伏せ、リゾート開発に同意させたのは他でもない自分だった。

齢80歳になるキマリにとって、古くからの風習を守り

精霊とともにある島の暮らしは、なんの不満もないものだった。

しかし若い島民たちはそうはいかない。

時代の流れとともに否応なしに、この島にも新しい文化が持ち込まれる。

新しい文化を知れば、それだけ欲深く多くの物を望む者が現れるものだ。

毎日のように島民に開発によって受けることになるだろう恩恵を

まるで神の教えを説くように呼びかける異国の人間達に、最初は懐

疑的だった島民たちも

しまいにはすっかり洗脳されたようだった。

島さえ開発されれば、島の巫女さえ首を縦に振れば楽な暮らしが手に入るのだと

信じて疑わないようになってしまった。

そして何よりも島が開発されれば、医者はいないこの島にも医療施設が整う。

ささいな病や怪我で命を落とす者は確実に減るのだ。

精霊達に感謝し、自然の恵みに感謝する生活に不満を抱く者も、

今よりも便利で楽な生活を望む者も日に増えていく。
つくづくと人間は欲深く愚かな存在なのだとキマリは感じざるを得
なかった。

いくら最長老とは言え、とうとうキマリにも島民たちを抑えること
は困難になってきたのだ。

覚悟を決めキマリは、医療設備があれば救える命もあるのだと若い
巫女に訴えた。

そのためには少しの犠牲には目をつぶらなければならぬと巫女を
諭した。

最初は渋っていた若い巫女も、最後には島の最長老のキマリの意見
を受け入れた。

自分では島の将来を思っていたことだった。

しかし、多くの自然を失いつつある今となっては
果たしてそれが正しいことだったのか……

海から吹く風に乗り、底知れない畏れと不安がキマリの胸に去来す
る。

「島の巫女よ。あなたはわしを恨んでおられるか……」

第六話

遠くから名前を呼ぶ声にカリ・ヒは振り返った。

幼い頃から聞きなれた乳母のミヤナの声だ。

森の中を小走りにミヤナが駆けてくる。その傍らには5歳ほどの少女がついていた。

ハアハアと息を切らせながら、カリ・ヒの元に辿り着いたミヤナに「そんなに急いでどうした？ミヤナ」とカリ・ヒは尋ねた。

「それが、私にもさっぱりわからないのです。

いきなりナキアが私の手を引っ張り……」

「ナキアが？」

カリ・ヒは傍らにいる5歳ほどの少女ナキアの視線まで腰を下ろすと

「どうした。ナキア？」

と優しく尋ねたが、ナキアが応えるはずもなかった。

ナキアは一年ほど前の嵐の翌日、マウリ島の砂浜に打ち上げられていた。

幸い命に別状はなかったがナキアは言葉が話せなかったのだ。

だが耳が聞こえないわけではなく、恐らくは波に飲まれた恐怖から言葉を失っているだけだろうと思われた。

素性も知れず身寄りもなく、言葉も話せない少女にナキアと名付け、カリ・ヒが手元に引き取ることにしたのは、

何かしらナキアの内側に眠る「力」の存在に薄々と感じていたからだった。

ナキアは何か言いたげに一点の曇りもない瞳で、カリ・ヒを見つめると

小さな手でカリ・ヒの手を握りしめた。

突然、一陣の風が吹きつけカリ・ヒは全身を強く打たれたような衝

撃を受ける。

ざわざわと森の木々が騒ぎ、カリ・ヒは身震いした。

．．．．ル　．．．．クル．．．．ナ．．．．

途切れ途切れにカリ・ヒの耳に届く小さな声は、

やがて大きなうねりとなって聞こえ出す。

いくつもの入り混じった声々が溢れ

カリ・ヒは目を閉じてその言葉を聞き取る。

精霊の声がカリ・ヒに語りかけたのだ。

目を閉じたまま、ゆらゆらと大きく体を揺らし始めたカリ・ヒを

ミヤナとナキアは見守りながら静かに佇んでいた。

やがてカリ・ヒが目を開けると

「カリ・ヒ様、精霊の声が聞こえたのですね」

ミヤナが安堵の表情を浮かべた。

しかしカリ・ヒの面差しには凜とした厳しさがあった。

そして、深く息を吐くと幼いナキアに目を向け

「そうか．．．．。ナキア、あなたが．．．．」

と呟いた。

第七話

しばらく言葉もなく佇んでいたカリ・ヒは乳母ミヤナに振り向くと「ミヤナ、精霊達の声を聞いた。もうすぐ大きな波がこの島を飲み込む」

と告げた。

「まことでございますか？」

驚くミヤナに

「おまえはナキアを連れて、他の島民たちと共に聖なるマイヒ山に避難しなさい」

「カリ・ヒ様は行かれないのですか」

「わたくしにはこの島の巫女としての最期の勤めがある」

「最期だなんて、そんな！」

嗜めるように言うミヤナの瞳には涙が滲む。

「あなたは、この島の巫女。大事なお方ではありませんか！どうか最期などとおっしゃらないで」

「いいえ。わたくしが巫女であつたのは今日までのこと。

これからはナキアが巫女となる」

両の手を口にあて、わなわなと震えながら

「そ、そんな！ ナキアはまだ幼いのです！

それに今だ言葉が話せないではありませんか」

ミヤナが訴えた。

カリ・ヒは深く静かに息を吐くと

「精霊達がナキアを巫女に選んだのだ。

ミヤナ、おまえはナキアをこの先守っておくれ」

と告げ、再び幼いナキアの視線まで腰を下ろすと

「ナキア……、もう何も畏れることはない。あなたの中に眠る力を咎める者はいない。あなたの中に眠る力

どうかわたくしの遺志を受け継いで、巫女としてこの島を守ってお

くれ」

ナキアの髪を撫でながら語りかけた。

声もなく涙を流す少女に、カリ・ヒは

自分の胸元で揺れていたヒスイの首飾りをそっとかけた。

「それは巫女の証の首飾り！ 代々カリ・ヒ様の一族に伝わるものではありませんか」

「良い。今からはナキアが巫女であるのだ」

森の緑の梢がざわざわと騒ぎ立てる。

吹く風の匂いが変わるのをカリ・ヒは敏感に感じ取った。

「ミヤナ！もう時間がない。早くナキアとお行き！」

巫女としての誇り高い威厳を持った声でカリ・ヒが命令するとミヤナはその場に泣き崩れた。

だが、幼い巫女ナキアがその手を力強く引つ張る。

涙ながらに何度も後を振り返りカリ・ヒの名前を呼びながら遠くなっていくミヤナの姿に

「どうか無事でマイヒ山にたどり着いて……」
とカリ・ヒは祈った。

やがて毅然とした表情で、森をあとにすると
神の住む場所と呼ばれる砂浜に向かった。

あれほど穏やかだった海は、その深い青い色を変え
空には強い風と鈍い色の厚い雲が漂っていた。

ク……ル…… ナ・ミ…… クル……

途切れることなく聞こえる精霊達の声に耳を傾けながら、
若い巫女カリ・ヒは目を閉じ祈る。

どうか無駄に多くの命が消え失せないように

どうかいつまでもこの島が楽園であるように
そのためなら、この命を捧げると両手を合わせ神に精霊に祈った。

第八話

砂にめり込む重い足を引きずりながら、ジョンはただあてもなく歩き続けていた。

彼の心の中には最早、後悔しかない。

まだジョンが大学生だった頃、気紛れに立ち寄った南の小さな島。文明とは程遠い日々の暮らしを営む純朴な島民たちと、

精霊たちの言葉を伝える巫女を崇め奉るマウリ島は、ジョンにとって神秘の島として

印象深く残った。

必要なものだけあればいいという、太古からの暮らしを営むマウリの人々は神々しくさえ映った。

この島の素晴らしさに触れることが出来たのなら、人間としての根本的な幸福とは何なのか

訪れたすべての人に味わってもらえるかもしれない。

単純にジョンは考えた。

今、ジョンは恐ろしくてたまらなかった。

マウリ島を荒らし、人々の心を変えてしまった原因は自分であるかのような罪悪感に押し潰されそうになっていた。

穏やかだった海が一変して凶暴な姿に変わった。

干潮でもないのに、いきなり海面が低くなったかと思ったのもつかの間

荒れだした海の上、頼りない木の葉のように揺れる小船の上で、モロは声の限り

「死にたくない！助けてくれ！死にたくない！！」
と泣き叫ぶ。

相棒のヤムは真っ青になりながら、背後に迫った大波を目の当たり

にして

自分の命が残り少ないだろうことを覚悟した。

渚のコテージでロバートは、つくづくと海を眺めると
わずかな異変に気付いた。

先程まではあれほど穏やかだった海が

急に凶暴な色に変わったかのように見えた。

心なしか一瞬、すべての波が消滅したようにも見え

尋常ではない雰囲気鋭く嗅ぎ取った。

「これは……、一体何が起きているというのだ」

急に大きくなった波の音に、うたた寝していた真弓は不安に駆られ
隣で眠っていた哲司を揺り起こした。

「ねえ、何かおかしい感じがしない？」

そう言う真弓に、まだ寝ぼけ眼の哲司はくちづけしながら

「悪い夢でも見たのか」

と笑った。

細い真弓の体を抱きしめながら

「大丈夫、大丈夫さ」

つぶやきながら、再びまどろみ始めた。

第九話

幼い少女と年配の女性を先頭に、この島唯一の山マイヒを指す一団があつた。

ある者は泣きながら、ある者は途方に暮れながら、ある者は蒼白になりながら 聖なる山を目指し、ひたすら走る。

大きな波が島を襲うというカリ・ヒの最期の言葉の意味を島を荒らした罰が下つたのだと漏らす者もいた。

そのほとんどは古くからこの島に住む島民だったが、他に数名の観光客らしい姿もあつた。

年齢、目の色、肌の色、言葉は違つていても、皆 力の限り山道を登つた。

山道が険しい傾斜に変わる山の中腹に差し掛かった頃、誰かがあげた

「あれを見る！」

という叫び声に、一同が振り向き海を見つめた。

今まで聞いたこともないような恐ろしい轟音と共に
はるか水平線の彼方から、白くうねった大きな波が
幾重にも重なつて島を目がけて押し寄せてくる。

まるで大きな獣が襲い掛かるように波は容赦なく、
その口を開けて一瞬に島を飲み込んでゆく。

草も木も家も人も、すべて残らず飲み込んでゆく様を

山に向かう途中の一団は言葉にならない声をあげて見た。

「カリ・ヒ様！巫女様っ！」

「こんなことになるなんて、こんなことに」

「何故！どうしてなんだー！！」

悲鳴、怒声、皆、口々に叫びながら慟哭した。

ジョン・スレイターは呻き声を洩らしながら、その場につくりと

ひざまづいた。

ミヤナは溢れ出す涙を拭うことなく声の続く限りカリ・ヒの名を呼び続ける。

キマリは全身を震わせ、天を仰いだ。

幼い巫女ナキアは両の手を固く合わせ、ひたすら祈る。

神々の棲む楽園と呼ばれた美しい島が濁流に飲まれ、

わずかな間に無残な光景に変わっていく様は

山を目指した一団に決して癒える事のない罪悪感と悲しみの大きな爪あととして残った。

やがて静けさを取り戻した海に、はるか水平線の彼方から

寄せては返す波の音が繰り返す。

波が透明な色に戻りつつある頃には、生き残った人々はようやく傷跡と向かい合うように

日常の暮らしを営むようになった。

不変に寄せては返す波、その色は深く哀しく美しく痛々しいほどの青をたたえていた。

最終話

降り注ぐ穏やかな木漏れ日の中、静かに両手を合わせて
ナキアは祈りを捧げる。

精霊の声と共に、かすかに語りかける聞きなれた優しい声に
目を閉じながらナキアは微笑を浮かべた。

カリ・ヒ様……

巫女の暮らしにはもう慣れたか ナキア？

ナキアがこくりとうなずくと

ミヤナはやさしくしてくれるか？

尋ねる声に、わずかに曇らせた表情になった。

ミヤナに冷たくされているわけではなかった。

しかしカリ・ヒの乳母であったミヤナにとっての

唯一人の『聖なる巫女』はカリ・ヒだけなのだ。

今でもカリ・ヒの事をミヤナは忘れたことはない。

だがそれはミヤナだけではなかった。

マウリ島が大波に飲まれてから、すでに二年の月日が流れ

島が随分と復旧した今でも島民たちの心の中にはカリ・ヒが住んで
いた。

巫女としての最期の務めを果たし大波に姿を消したカリ・ヒを

誰もが聖なる巫女姫として讃えた。

カリ・ヒから受け継ぎ、ナキアが巫女となった現在でも

島民達は幼いナキアの背後に在りし日のカリ・ヒの姿を重ねて見て
いた。

『カリ・ヒ様、悪魔の子として生まれ故郷を追われ嵐に巻き込まれて、この島に流れ着いた私にやさしくしてくれた貴女のご恩は決して忘れません。』

でも、未だに声を出す事の出来ない私にカリ・ヒ様の跡を継ぐのはあまりにも大きすぎるのです……

カリ・ヒ様は偉大すぎます。私はこの先、どうしたらいいのか……』

心の中で語りかけるナキアに、カリ・ヒは答える。

何もわたくしのようにすることはない。

おまえとわたくしとは持つている力が違うのだから。

おまえはおまえの出来る事をすれば良いのです。

そしておまえを新しい巫女に選んだのは精霊達。

その意味を考えて行動するのですよ。

そこまで語りかけると、カリ・ヒの声は急に遠のいた。

いつまでもわたくしの魂は、精霊と共におまえのそばにいます

……

という言葉を最後に残して。

さわさわと耳元を渡っていく海風に乗って、遠くからミヤナの声が聞こえる。

しきりにナキアの名を呼びながら近づいてくる声に、ナキアは

『ここにいます』と念じてみた。

それはナキアにとって初めての試みだった。

今まで姿なき精霊たちと言葉を交わすことはあっても

生身の人間に言葉を念じて送ることはなかった。

これはナキアにとっても、ひとつの賭けであった。

もしも自分の念じた言葉が相手に伝えることが出来たのなら
巫女としての役割を果たすことが可能になるのかもしれないと
幼いながらもナキアは考えた。

しばらくして姿を現したミヤナは、呆然とした面持ちで

「ナキア様……、今、ここにいますとおっしゃいましたか」
と尋ねた。

こくりとナキアがうなづくミヤナは

「ああ、なんということでしょう。私は今までナキア様のお力を信じておりませんでした」

跪きながらナキアの手を取り、涙ぐんだ。

「どうかお許し下さい。私は今までカリ・ヒ様のことをばかりを思い浮かべて

貴女様に向き合うことをしませんでした。私が間違っております」

「自分を責めてはいけません。それだけカリ・ヒ様を愛していたのでしょう」

頭の中に響いてくる声に、ミヤナは顔をくしゃくしゃにして泣いた。
ミヤナの胸には初めて靈力に目覚めたカリ・ヒの幼い頃の姿が蘇った。

『ミヤナ、わたくしはまだカリ・ヒ様には遠く及びませんが
わたくしを助けて支えてくれますか』

そう聞くナキアに、何度もうなづきミヤナは立ち上がると

「心をこめてお仕えさせていただきます。聖なる巫女よ」
涙を拭いてもう一度ナキアの小さい手を取った。

「さあ、ナキア様、参りましょう。島民たちが待つております」

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4453f/>

楽園 ~ deep blueによせて ~

2010年10月28日08時16分発行